

タイトル『ゴージャスお宝鑑定家』

「うーん、ゴージャス！」16』

シーン：『剛田質店』、ゴージャスなお宝の到来

場所：剛田質店、カウンター前

時間：午後

【カメラ】店内を広く映し、剛田質店の落ち着いた雰囲気を感じさせる。照明は温かく、店内のディスプレイには美術品が所狭しと並べられている。客の足音が響き、扉が開く音が鳴る。

【客】（やや緊張した様子で）

「こんにちは…あの、ちょっとお伺いしたいことがあります。」

【白金】（にっこり微笑みながら）

「いらっしやいませ。何かお探しのものがござい
ますか？」

【客】（少し迷いながら）

「いえ、ちよつと売りに来たんです…。」

白金はお室の買取に慣れているが、少し警戒
心を持ちながらその品を見守る。

【客】（ゆっくりと鞆から手裏剣を取り出す）

「これなんです…。」

【白金】（目を見開いて）

「えっ、手裏剣…！？しかも、オパールでき
ている？」

【客】（緊張しながら）

「はい。実はこれ、家に代々伝わっているもの
なんです、あまりにも高価で扱いが大変で
…。」

【白金】（心の中で）

「オパール？こんな珍しいもの…本当に価値
があるのか？」

その時、バックルームから剛田が登場。

【剛田】（ドアを優雅に開け、足元を引き締めながら）

「ゴージャスなお客様が来たというのに、この私が遅れるとは…。」

【白金】（思わずため息）

「お客様が来てますよ、剛田さん。」

【剛田】（満面の笑みで）

「なに、ゴージャスな品物があるなら、私を呼ぶべきだ！」

剛田はオパール製の手裏剣を見て、目を輝かせる。

【剛田】（うっとり）

「うーん、ゴージャス…！この手裏剣、オパールだと？見事な美しさだ！これはただの武器ではなく、まさに芸術品だ！」

【客】（驚きつつ）

「えっ、そんなに…？」

【白金】（小声で）

「剛田さん、またすぐにそういうことを言う
…。」

シーン②：エメラルドの石言葉と価値の熱

弁

場所… 剛田質店、カウンター前

時間… 午後

【剛田】（手裏剣を手に取り、ゆっくりと説明を始める）

「見よ、このオパールの輝き。エメラルドの石言葉には、『新たな始まり』、そして『希望』が込められている。オパールもまた、希望の象徴であり、この美しい色合いこそが未来を照らす光だ！」

【白金】（内心で）

「エメラルドって、手裏剣に関係なくないです

か？」

【客】（興味深そうに）

「ほ、ほんとにそんな意味が込められてるんですか？」

【剛田】（熱弁を振るいながら）

「もちろん！だからこそ、これほどの美しさと輝きを持つ手裏剣が、この世に存在すること自体が奇跡だ。」

【白金】（目をつぶりながら）

「そんなに語るなら、金額も相当なものになるんでしょね…。」

【客】（少し混乱しながら）

「そ、そうなんですか…？」

【剛田】（自信満々に）

「うむ、君の目は確かだ。だが、価格というのは、単に美しさだけではなく、この芸術的価値をどれだけ理解できるかにかかっている！」

【白金】（ついに我慢できずに）

「剛田さん、あまりにも豪語し過ぎじゃないですか？」

【剛田】（にやりと微笑んで）

「これがゴージャスというものだ。」

シーン③：実演と痛みの芸術

場所… 剛田質店、カウンター前

時間… 午後

【客】（興味津々に）

「本当に素晴らしいですね…。でも、もしよければ、手裏剣を使って実演してみませんか？」

【白金】（ビクツとする）

「えっ、ちよ、ちよっと待ってください！ 剛田さん、実演は危ないですよ…！」

【剛田】（すでに手裏剣を握りながら、顎に手を当て）

「ゴージャスな品物は、ただ鑑定するだけでは

その真価を知ることにはできない。」

【白金】（汗をかきながら）

「い、いやいや…剛田さん、これ、本当に危ないですから！」

【客】（興奮して）

「ぜひ、見たいです！」

【剛田】（ゴージャスな動きで、優雅に手裏剣を振り回す）

「見よ、私はいかにして手裏剣を操るか…。」
その瞬間、剛田の腕が伸びきったところで、手裏剣が剛田の肋骨に刺さる！

【剛田】（痛みに顔をゆがめながらも、極上の微笑み）

「うーん、この痛みも芸術だ…。これこそ真のゴージャスな表現。」

【白金】（驚きと呆れ顔で）

「ちよっと待ってください！痛いでしょ、それ！」

【剛田】（冷静に）

「痛みがあるからこそ、さらに深みが出るのだ。」

【白金】（ため息をついて）

「剛田さん、無理しないでください…。」

シーン④：金額提示と予想外の結末

場所： 剛田質店、カウンター前

時間： 午後

【剛田】（痛みを感じながらも、真剣な表情で）

「さて、このオパール製の手裏剣の価値を決める時が来た。」

【白金】（心の中で）

「絶対に高額だろうな…。」

【客】（緊張しながら）

「いくらになるんですか？」

【剛田】（ゆっくりと息を吸って、ゴージャスに微笑む）

「100万円だ！」

【白金】（驚愕し、目を見開く）

「えっ、100万！？本当に？」

【客】（興奮して）

「本当に！？その値段で売ってくれるんですか！？」

【剛田】（優雅に）

「当然だ。ゴージャスな価値に見合った金額だ。」

【白金】（目をつぶりながら）

「いや、値段がゴージャス過ぎます…。」

シーン5：オチとエピローグ

場所： 剛田質店、カウンター前

時間： 夕方

【剛田】（痛みを感じつつ、無理に微笑む）

「うーん、ゴージャス…！この金額、まさにふさわしい。」

その瞬間、剛田の表情が一気に崩れ、力なく後ろに倒れ込む。手裏剣がそのまま床に転がる。

【白金】（目を丸くして）

「ちょっと待ってください！剛田さん、どうしたんですか！？血が…出てる！」

剛田の肋骨に刺さった手裏剣が深く刺さり、出血がひどくなっている。

【白金】（必死に）

「早く、救急車を呼んで！」

【客】（驚き、動揺）

「えっ、あれ…本当に血が…？」

【白金】（手を振りながら）

「お客様、すぐに外に出てください！救急車を呼びますから！」

【剛田】（弱々しく微笑みながら）

「ゴージャスな痛みだ…。」

【白金】（怒りと心配を込めて）

「剛田さん！そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！すぐに手当てしないと！」

【カメラ】白金が救急車を呼び、剛田はそのまま救急車に運ばれていく。

【白金】（ため息をつきながら）

「ゴージャスな価値を分かるのはいいけど、あんまり無理しないでくださいよ…。」

【エピローグ】

【ナレーション】

「こうして、また一つのゴージャスな逸話が生まれました。しかし、剛田質店は変わらずに高価なお宝を鑑定し続けるのだった。ゴージャスな品物があれば、どんな危険も…芸術の一部として、受け入れる。それが剛田流だ。」

【終了】